

日韓共同理工系学部留学生 予備教育プログラムに関する調査報告

－第1期生に対するプログラムのまとめと 第2期生に対する準備状況を中心に－

佐藤尚子・案野香子・加藤扶久美

I. はじめに

1998年（平成10年）10月に故小渕前首相と金大中韓国大統領により日韓共同宣言が発表され、それに基づく新たな留学生事業である「日韓共同理工系学部留学生事業」（以下、日韓プログラムとする）が2000年度より始まった。これは、韓国の高等学校卒業生の中から選抜された学生を日本の国立大学理工系学部留学させる制度である。これらの学生に対する1年間の予備教育は、前半の6ヶ月を韓国で、後半6ヶ月を入学予定の国立大学の留学生センターで行われる。この日韓プログラムの実施によって、留学生センターにとっては、学部入学前予備教育という新しい教育領域が加わった。

さて、2001年10月5日に開催された2001年度国立大学日本語教育研究協議会（於・立命館アジア太平洋大学）留学生センター部会では、前年度に引き続き、この日韓プログラムについて協議を行った。本報告は、部会開催にあたり、事前に行ったアンケート調査のまとめである。本アンケートの目的は第1期生のまとめと第2期生に対する準備状況を調査することにある。（本報告の筆者3名は、2001年度留学生センター部会のコーディネーターである。アンケートをまとめ、報告書を書くことについては、2001年度国立大学日本語教育研究協議会です承されている。）

なお、今回の部会が開かれるまでに、この日韓プログラムについて、以下のような説明会やシンポジウムが開催され、文部科学省の担当官や各大学の担当者によっていろいろ協議が行われてきている。また、必要に応じてアンケート調査も行われている。

2000.1.13 文部科学省による「日韓共同理工系学部留学生事業に関する説明会」
(東京大学本郷キャンパス)

- * 2000.3 第1期生の韓国での予備教育が始まる
- 2000.3.6-7 琉球大学 日本語予備教育に関する研究会
「専門教育(学部)との連携について
—日韓共同理工系学部留学生事業の実施を前に—」
- 2000.5.29 大阪大学留学生教育・支援シンポジウム
「日韓共同理工系学部留学生受入れのための予備教育のありかた
—期待される専門教科教育を中心に—」
- 2000.10.6 2000年度国立大学日本語教育研究協議会(第15回)留学生センター部会
「専門教育との連携—日韓共同理工系学部留学生の予備教育を中心に—」
(名古屋大学)
- * 2000.10 第1期生渡日 日本での予備教育が始まる(受入れ:23国立大学)
- 2000.12.11 富山大学教育・研究フォーラム
「日韓共同理工系学部留学生プログラムの現状と課題」
- 2001.2.27 文部科学省による「日韓共同理工系学部留学生事業に関する説明会」
(東京大学駒場キャンパス)
- * 2001.3 第2期生の韓国での予備教育が始まる
- 2001.9.21 大阪大学留学生教育・支援協議会
「日韓共同理工系学部留学生予備教育事業の課題と今後の展開
—日本における第2期予備教育の充実を目指して—」
- 2001.10.5 2001年度国立大学日本語教育研究協議会(第16回)留学生センター部会
「日韓共同理工系学部留学生の予備教育をめぐって」
- * 2001.10 第2期生渡日 日本での予備教育が始まる(受入れ:26国立大学)

II. アンケート調査結果のまとめ

本アンケート(資料参照)は2001年8月に次の30大学に送付し、東京大、東京学芸大、大阪外国語大を除く27大学より回答を得た。

送付先:①2期生の受入れを表明した28国立大学の留学生センター

北海道大、東北大、筑波大、群馬大、埼玉大、千葉大、東京大、東京学芸大、
東京農工大、東京工業大、電気通信大、横浜国立大、新潟大、富山大、金沢大、信
州大、岐阜大、名古屋大、三重大、京都大、大阪大、神戸大、岡山大、広島大、九

州大、長崎大、熊本大、琉球大

②東京大、京都大の第1期生の予備教育を行った東京外国語大と大阪外国語大の留学生日本語教育センター

第2期生来日前にアンケート調査を行ったこともあり、予定・未定といった不確定的な回答も若干含まれていたのは、いたし方のないことである。従って、以下の結果報告では既に公表されているデータ以外は大学名を記載することは差し控えることとする。また、本報告ではアンケートで回答を求めた質問項目全てについて記載してはいない。

本アンケートの締切りは8月31日であった。それ以降、第2期生の配置数の変更等があった大学もあるが、本報告では提出された時点での数字、内容をそのまま使用した。

1. 受入れについて

1-1 2001年度（第2期生）受入れ人数

【表1】

5人（17校）	北海道大学、東北大学、筑波大学、千葉大学、東京外国語大学、東京農工大学、東京工業大学、電気通信大学、新潟大学、岐阜大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、神戸大学、岡山大学、広島大学、九州大学
4人（4校）	埼玉大学、横浜国立大学、富山大学、三重大学
3人（3校）	群馬大学、信州大学、熊本大学
2人（2校）	金沢大学、長崎大学
1人（0校）	—
0人（1校）	琉球大学

1-2 予備教育期間中の住居

国際交流会館または学寮に入居することになっている大学がほとんどであるが、入居期間は大学により多少の違いがある。

【表2】

半年（6校）	群馬大学、富山大学、金沢大学、信州大学、名古屋大学、広島大学
1年（15校）	東北大学、筑波大学、埼玉大学、東京農工大学、東京工業大学、電気通信大学、新潟大学、岐阜大学、三重大学、京都大学、岡山大学、九州大学、長崎大学、熊本大学、琉球大学
1年半（2校）	北海道大学、千葉大学
2年（4校）	東京外国語大学、横浜国立大学、大阪大学、神戸大学

2. ワーキンググループおよびコーディネーターについて

2001年度(第2期生)プログラムのためにワーキンググループを設置した大学は17大学あり、構成メンバーは留学生センター教官、受け入れ学部教官が主体となっている。

【表3】ワーキンググループおよび構成メンバー

	構成メンバー
①	センター教官、工・農学部教官
②	センター長、センター教官1名、工学部教官4名、理学部教官3名
③	センター教官2名、理・工学部教官各1名、留学生課1名
④	センター長、センター教官、工学部教官2名
⑤	センター長、センター教官、日本語コーディネーター、工学部留学生委員7名
⑥	センター教官
⑦	センター長、センター教授、関係学部のセンター委員
⑧	センター長、センター教官2名、工学部教官2名、事務官3名
⑨	センター教官、工学部教務委員長、工学部留学生担当教官
⑩	センター長、日本語教官1名、指導部門教官1名、受け入れ学部教官各1名
⑪	センター長、センター担当教官、受け入れ学部教官
⑫	センター長、日本語教育担当2名、相談指導業務担当1名、事務局3名
⑬	受け入れ学部教官、全学共通教育機構、センター教官・事務官
⑭	国際交流委員会学生交流部会員5名、センター教官2名
⑮	センター長、センター教官、理学部・工学部教官
⑯	センター教官3名、工学部教官3名
⑰	センター教官、工学部教官、事務官

【表4】予備教育コーディネーター担当

コ ー デ ィ ネ ー タ ー	大 学 数
留学生センター日本語教官	18
留学生センター指導担当教官	3
留学生センター日本語担当教官+受け入れ学部留学生専門教育教官	2
留学生センター日本語担当教官+受け入れ学部教官	2
受け入れ学部専門教育教官	1

【表5】日本語科目と専門科目の連携について (数字は大学数)

連 携 の し か た	第1期生	第2期生
コーディネーターが内容を調節	9	12
完全に独立して授業を行う	11	10
コース担当者全体で話し合って内容を調整	3	4
そ の 他	0	1

3. コース形態と開講科目

【表6】は、各大学において当プログラム第2期を行うにあたってのコース形態、開講科目とそのコマ数をまとめたものである。科目が完全に決定されていないなどの諸事情で合計コマ数と記載された科目が一致していない大学もある。特に断りのある場合を除き、授業1コマあたりの時間は90分である。なお、①～⑭の通し番号は、【表3】の番号とは一致しない。

コース形態の略称は下記の通りである。

独：日韓のためだけのクラス・コース

研：日本語研修コースとの合同

補：日本語補講との合同

学：学部科目

他：その他

【表6】

	形 態	全コマ数 [選択]	日本語 コマ数	専門科目・コマ数	その他科目・コマ数
①	独	20	10	数3、化1、物3、生1、英2	0
②	独+研	20	10	数2、化1、物1	日本事情1、英1、 各自研究課題4
③	研+他	19	16	数2（予定）、物1（予定）	0
④	研	19 [4]	14	数1、化1、物1、生1	セミナー 1
⑤	独+研+他	18	8~10	数2、化2、物2、生2	英2
⑥	独	18	13	数1、化1、物1	英2
⑦	独+研+ 他	18 [4]	8	数1、化1、物1、生1、補講2	英2、専門分野・ 文化体験学習2
⑧	独+（1 コマ）研	17	10	数1、化1、物1、生1、英1	日本事情 1 Life in Japan 1
⑨	独	17	8	数2、化2、物2、生2	カウンセリング 1
⑩	独	17 [4]	10	数1、化1、物1、 英語による専門科目4	総合科目
⑪	研	16	11	数1、化1、物1、英1	日本事情1
⑫	独+研 ^注	16	10	数1、化（未定）、物1、生（未定）	コンピュータ1、英 語1、日本事情1、 日本文化（月1回）
⑬	独+補	16	10	数2、化1、物1、コンピュータ1	コンピュータ1（全 2コマ）
⑭	研	16 [3]	9	数1、化1、物1	英語1（全2コマ）

	形態	全コマ数 [選択]	日本語 コマ数	専門科目・コマ数	その他科目・コマ数
⑮	独+補+学	13+ α	10+ α	数1、化1、物1	HR1、TA3
⑯	補	15	4	数2、化1、物1、総合1	6
⑰	独+研	15	8	数2、化2、物2	英1
⑱	独	15	8	数2、化2、物2	HR 1
⑲	独+他 ^注	15	8	数1、化1、物1、生1、英1	2
⑳	独	15 [5]	10	数1 化1、物1、生1	0
㉑	研+補+他	15 [2]	11	数1、化1、物1	1
㉒	独(+補 +他)	14 ^注	9	数1、化1、物1、生1	HR 1
㉓	研	14予定	10	数1、化1、物1、補講1 (予定)	スクーリング (予定)
㉔	独+補+ 他	14	9	数1、化1、物1、生1	日本事情+HR 1、 英語1
㉕	独	14	5	数3、化2、物2、英2	0
㉖	補	13	8	数2、化2、物2+集中 ^注	0
㉗	独+補	10~12 [2]	5	数1、化1、物1、コンピュータ技 法1	2

《注》

- ⑫：独（専門科目）+研（日本語、日本事情、日本文化）
- ⑬：レベル差が大きい場合には、一部学生その他コースへの編入も検討する
- ⑭：75分×10コマ、50分×4コマ
- ⑮：学期開講中は各々週2コマ。その他、冬・春休みに数学、物理を集中補講

4. 日本語科目使用教材

第2期生が来日してから変更される可能性があるが、アンケートでは次のような日本語教材が候補としてあげられていた。

【表7】

《総合日本語教材》 『テーマ別中級から学ぶ日本語』（研究社）、『中級日本語』（凡人社）、『上級日本語』（凡人社）、『文化中級日本語Ⅰ・Ⅱ』（凡人社）、『日本語中級J501 中級から上級へ』（スリーエーネットワーク）、『現代日本語コース中級Ⅰ・Ⅱ』（名大出版）、『新聞で学ぶ日本語』（ジャパンタイムズ）
《漢字》 『Intermediate Kanji Book 漢字1000plus vol.1』（凡人社）、『BASIC KANJI BOOK vol.2』（凡人社）

《聴解》 『毎日の聞き取り50日 上・下』（凡人社）、『ニュースで学ぶ日本語 part 2』（凡人社）
《作文》 『留学生のための論理的な文章の書き方』（スリーエーネットワーク）、『日本語作文Ⅰ』（専門教育出版）
《読解》 『やさしい科学技術日本語 読解入門』（東京工業大）、『中級からの日本語―読解中心―』（新典社）、『速読用の文化エピソード 中級用』（凡人社）
《問題集》 『項目別日本語文法問題集Ⅰ 中級用』（凡人社）、
《語彙・表現》 『どんな時どう使う日本語表現文型200』（アルク）
《ビデオ》 『留学生・技術研修生のための使える日本語』（紀伊国屋書店）
その他、自作教材

5. 日本語レベルへの対応

第1期生に比べ第2期生に対する韓国での予備教育では日本語の授業が減少している。それに対する対応策について。

【表8】

対 応 策	大学数
特に考えていない	10
クラスを増やす	6
授業内調整	5
レベルを下げる	1
その他	4

【表8】において「特に考えていない」と答えた10大学のうち、「学生来日後の実際のレベルを見てから具体的対応をする」という回答が7大学からあった。

6. 単位認定

予備教育期間中に、学部生を対象とした専門科目や教養科目を受講した場合、それを単位として認めているか否かについて。

【表9】

単位認定の有無	大学数
認めている	1
認めていない(「特に受講させていない」を含む)	24
未定	1

7. 広報活動

2001年度のプログラムのために下記のような広報活動が行われている。

- ・慶熙大学校へ行き、大学説明会を行った。(東京工業大学、東京農工大学、富山大学、信州大学、琉球大学)
- ・韓国語でパンフレットを作成した。(富山大学、琉球大学)
- ・第一期学生の大学紹介(北海道大学)
- ・紀要へ第一期の報告論文掲載(太田亨2001pp.53-80)(金沢大学)
- ・ホームページの更新(金沢大学)
- ・留学生センターのニューズレターに記事を掲載した。(大阪大学)
- ・第一期の日本語授業の実践報告を兼ねて、『リソース集』を作成した。(大阪大学)
- ・NHKの取材を受け、授業風景が放映された。(九州大学)

8. 第1期の課題と第2期のための対策

第1期に生じた問題について記述によって得られた回答を、内容ごとに大きく【表10】のようにまとめた。更に8-1以下に、問題についての具体的なコメント、そして、第2期にむけての対策について記してあったものをあげた。

【表10】第1期の問題点 数字は回答数

コース運営面		授業内容		生活面		その他	
来日の遅れ	6	日本語	7	生活態度	6	転学科	3
他学部との連携	3	専門科目	7	奨学金の遅れ	4	兵役	1
担当者	3	来日の遅れ	2	日本人との接触	2	全般	3
予算	2	学部・教養の授業	2	住居	2		
その他	2	その他	2				

8-1 コース運営面

A 来日の遅れ

- ・「予定通りスタートした日本語研修コースとの調整やスケジュール建て直しに困難が生じた」
- ・「コース終了が一ヶ月延びた」

《対策》「今期（2001年度）は前年度の実績が叩き台としてあるので、それを目安にしている」

B 他学部との連携

- ・「専門科目の担当者との連携がうまくいかなかった」
- ・「工学部との関係は事務当局の協力もあり、順調だった」

《対策》「連携して問題に対応していける体制を作った」

C 担当者

- ・「1名の教員に負担が集中した」

《対策》「各学生にチューター、指導教官をつけて、一部の教員に仕事が集中しないようにした」

D 予算

- ・「コース開始前、どのぐらいの予算がつくか不明確だった」

E その他

- ・「ワーキンググループがなかった」

8-2 授業内容

A 日本語

- ・「漢字の力が予想以上に低かったため、途中から漢字クラスを作るなど対応した」
- ・「こちらで準備した教科書を既に韓国で学習してきた」
- ・「学習者間の日本語のレベル差が激しかった」
- ・「来日時の学生の日本語力が予想より低かったため、カリキュラムや教材を一部変更して文法や漢字の学習を強化した」
- ・「日本語授業については『非常に満足していた』という学生からの感想」

《対策》「最初から漢字に力を入れる」

「専門日本語の時間を増やす」

B 専門科目

- ・「専門科目については、高校での履修がまちまちなので、当初考えていた復習中心

の授業が新しい知識を教える授業になった」

- ・「専門用語が難しく、特に文系の授業が難しいので、そちらの予備教育をしてほしいという要望があった」
- ・「特に数学の能力の不足が目立ち、学部入学後、授業についていけるだけの基礎学力をつけさせることに腐心した」

《対策》「専門科目の必須語彙の韓国語対訳表を開講時に渡す」

C 来日の遅れ

- ・「全学教育日本語と連動させることができなかった」
- ・「専門科目を中心に、授業についていくのが遅れるなどの問題があった」

D 学部・教養の授業

- ・「教養教育の科目など、大学の授業を体験したかったようだ」

《対策》「予備教育期間中に学部の授業を聴講する機会を設けた」

E その他

- ・「当初学生の若さ、受身の学習態度に多少とまどいを感じた。しかし、全員基本的に大変真面目な学生だったので、困難な問題は生じなかった」

8-3 生活面

A 生活態度

- ・「取り立てて問題はないが、やや遅刻が目立つ学生がいた」
- ・「学生が授業に出たり出なかったりして、気が緩んでいるという印象」
- ・「来日当初一人暮らしに慣れず、精神的にまいっていた」
- ・「配置が決定済みで、中盤以降慣れるにつれ遅刻欠席が目立つ。留学の意義を初めによく注意しておきたい」
- ・「渡日三ヶ月ぐらいで体調不良が出た。より軽度により早期に回復するよう普段からの注意を心がけたい。なお、TAや留学生会からの支援も回復への重要な要素であった」
- ・「年齢が低いこともあり、生活規律面での問題も多かった。オリエンテーションを徹底したい」

B 奨学金の遅れ

- ・「生活費に困る学生がいた」
- ・「一時貸付などの措置をとらざるを得なかった」

C 日本人との接触

- ・「日本人の友だちができないという悩みを持つ学生がいる」
- ・「日本人学生との接点がありませんでした」

《対策》「クラブに入って関係を深めている学生もいる」

「日本人学生のボランティアチューターを確保した」

D 住 居

- ・「国際交流会館退去後の住居の賃貸契約に際し、保証人の問題が生じた」

8-4 その他

A 転学科

- ・「配置学科が本人の希望と異なることが来日後に判明」
- ・「転学科の希望者が出た」

《対策》「転学科は原則的にできないことをコースの始めに念を押し、所属学科での学習計画を立てさせる」

B 兵 役

- ・「在学中に兵役義務を果たしたいという希望者が出た」

C 全 般

- ・「学部入学時、入試などがなかったため、学生は1月以降緊張感に欠けていた」
- ・「学内の韓国人学生会が協力してくれたことが精神的支援に大いに助かった」

《対策》「工学部で面接を行うなど、対策をとる」

Ⅲ. おわりに

このアンケートの調査結果が報告された2001年度国立大学日本語教育研究協議会留学生センター部会の開催後、3週間のちに第2期生が来日し、受入れ大学での予備教育が始まった。

この日韓プログラムについてはいろいろな問題があるが、参加大学によるメーリングリストの立ち上げなど、より充実したプログラムとなるよう、参加大学の間で協力体制がつくられつつある。第2期生受入れ前という段階での調査の結果ではあるが、本報告が有益な情報となれば幸いである。

資料 送付したアンケート用紙

大学名: _____

記入者: _____

メールアドレス: _____

I 受け入れについて

1 学生の配置

1-1 昨年度は何人受け入れましたか。()人

1-2 今年度の照会は何人ありましたか。()人

2 予備教育期間中の学生の身分は何ですか。()

3 日韓共同理工系学部留学生事業のワーキンググループがありますか。

☐ある いつ発足しましたか。(年 月)
メンバーは誰ですか。()

☐ない

4 日韓共同理工系学部留学生事業を実施するにあたり、コーディネーターはいますか。
また、誰が務めていますか。コーディネーターの主な職務内容も含めてお答えください。

☐いる

☐留学生センターの日本語担当教官(職務内容:)

☐受け入れ学部の専門教官(職務内容:)

☐受け入れ学部の留学生専門教育教官(職務内容:)

☐その他() (職務内容:)

☐いない

5 予備教育期間中の住居はどこですか。

場所: ()

入居可能期間: ☐半年 ☐1年 ☐1年半 ☐その他()

II 今年度の日韓共同理工系学部留学生に対する予備教育について

*すでに時間割ができあがっているところは時間割を添付してくださいようお願い申し上げます。

1 コース形態は(該当箇所すべて印を付けてください)

☐日韓のためだけのクラス・コース

☐日本語研修コースとの合同

☐日本語補講との合同

☐学部科目

☐その他

- 2 1週間の授業全コマ数：1コマは（ ）分
（ ）コマ そのうち、選択科目（ ）コマ

1週間の授業コマ数内訳

日本語科目のコマ数（ ）コマ
専門科目のコマ数（ ）コマ
その他の科目のコマ数（ ）コマ

3 日本語科目について

3-1 授業担当者人数および担当コマ数

専任教官（ ）人（ ）コマ
内訳：留学生センター教員（ ）人（ ）コマ
他学部教員（所属： ）（ ）人（ ）コマ
非常勤講師（ ）人（ ）コマ
謝金講師（ ）人（ ）コマ
その他（ ）（ ）人（ ）コマ

3-2 今年度の日本語の科目の内容及び使用教材について、お知らせください。

4 専門科目について

4-1 専門科目ではどの科目を設けていますか。

数学（ ）コマ
化学（ ）コマ
物理（ ）コマ
その他（科目名： ）（ ）コマ

4-2 専門科目の授業担当者人数および担当コマ数

専任教官（ ）人（ ）コマ
内訳：留学生センター教員（ ）人（ ）コマ
他学部教員（所属： ）（ ）人（ ）コマ
非常勤講師（ ）人（ ）コマ
謝金講師（ ）人（ ）コマ
その他（ ）（ ）人（ ）コマ

5 その他の科目について

日本語、専門以外の科目があれば、その科目名、授業担当者人数および担当コマ数を書いてください。

6 日本語科目と専門科目との連携について

昨年度について

- ☐ コース担当者全体で話し合っ、内容を調整した。
☐ コーディネーターが内容を調整した。
☐ 完全に独立して、授業を行った
☐ その他

今年度も同じ方法で行いますか。

☐ はい

☐ いいえ

今年度は☐ コース担当者全体で話し合って、内容を調整する。

☐ コーディネーターが内容を調整する。

☐ 完全に独立して、授業を行う。

☐ その他

7 昨年度に比べ、今年度の韓国での予備教育では日本語の授業が減少していますが、それに対して、何か対応を考えていますか。

Ⅲ 予備教育期間中に、学部生を対象とした専門科目や教養科目を受講した場合、それを単位として認めていますか。

☐ はい

どの科目ですか。()

☐ いいえ

Ⅳ 今年度、このプログラムのために何か広報活動を行いましたか。

☐ はい

活動内容()

☐ いいえ

Ⅴ 昨年度、どのような問題がありましたか。今年度、それをどのように改善しましたか。
なるべく具体的にお書きください。

コース運営面：

授業内容：

生活面：

その他：

Ⅵ この留学生センター部会で、特に協議したいことや知りたい情報などがありましたら、お書きください。